

お花つみ

のの　しょうじ

「ゆきこ、桑井の桜みたいって言っていたわね？」

夕食のとき、母さんが突然聞いてきた。

「うん。きれいなんでしょ」

「それは、みごとよ。今度の日曜日行かない？」「行く、行く」

「邦彦さんも一緒よ」

邦彦さんとは、お隣の大学生のお兄ちゃんだ。小さい頃から遊んで貰っているし、私も好きだ。

「みんなでお兄ちゃんに行くの？」

母さんは、ちよつと困ったように言った。

「飯山のおばあちゃんで行ってほしいの」

私は、むせそうになった。

父さんは、ビールを置いて静かに言った。

「おふくろは桜が好きで、桑井には毎年行っているんだ。でも、来週は、母さんも父さんも都合がつかないし、ゆきこが行ってくれると助かるんだよ」

「桜は時季のものでしょ。それに邦彦さんが運転してくれるのだから、いいでしょ」

とんでもない　と思った。私は飯山のおばあちゃんが苦手なのだ。なんでって、うまく言え

ないけど、おばあちゃんは気むずかしいし、だいたい会えばお説教だ。それに、めがねの上からジロって見られるのもいやだ。

「頼むよ、ゆきこ」

父さんが、拝むかっこうをした。

私はしぶしぶ、うなずいた。

日曜日は、晴天だった。

お兄ちゃんは、後ろがへこんだワゴン車で現れた。

「あら、だいぶ古い車ねえ。大丈夫？」

母さんは遠慮がない。

「先輩からゆずってもらった車なんすよ。先週ぶつけちゃって。はは」

お兄ちゃんは、へらへらしている。

「お花見弁当たくさん作ったからね。邦彦さんも、おなかいっぱい食べてね」

「ラッキー。おれ、おばさんの料理好きなんだ。うれしいな。な、ゆきちゃん」

お兄ちゃんは私の気持ちなど気づいてない。

「ジュースやお菓子もほしいよ」

好きなチョコや、ジュースがあれば気がまぎれると思った。

「甘いものばかりとってちゃ、だめよ」

といいながらも、母さんは用意してくれた。

「おばあちゃんは気が短いから、早く行ったほうがいいわ」

追い立てられるようにして、車は発進した。カーブを曲がるたびに、タイヤがきしむ。本当にボロ車だ。それでも、お兄ちゃんは鼻歌なんか歌ってる。スマップだ。私も一緒に口づさむと、お兄ちゃんにはこっとした。

おばあちゃんは、家よりはるか手前の道で待っていた。ワゴン車とお兄ちゃんを見くらべると「よつこらしよ」と乗り込もうとした。ステップの高いワゴン車は、足の悪いおばあちゃんにとつては、乗り込むのも一苦労だ。お兄ちゃんが、あわてて後ろに回りこんで、支えようとする、おばあちゃんは、さも迷惑そうに、しっしっしと手を振った。

車内は静かだった。お兄ちゃんも、さすがに息苦しくなったのか、「ゆきちゃん、何年生になったんだっけ？」と、聞いてきた。

「五年生だよ」と答えると、

「そうか、大きくなったもんだなあ」

と、おじいちゃんのように言ったのが、おかしかった。

場が、ちよつとなごんだ気がした。

私も 何か話さなきゃ と思い。

「おばあちゃん、中野の東山の桜はもう散ったよ。桑井の桜は、大丈夫なの？」と聞いてみた。

「桑井は、山ん中だで」

低い声で、おばあちゃんが答えた。

「その桜、有名なんですか？」

お兄ちゃんが聞いた時には、おばあちゃんは、もう外を見たままだった。

一面に広がる黄色が目飛び込んできた。菜の花畑だ。

「春だなあ」

お兄ちゃんは、のんびりと言った。

菜の花の黄色を見ると、春が本当に来たという実感がわき、うれしくなる。

車は山道に入った。両脇には、白と赤の背の高いポールが立っていて、ガードレールはところどころ曲がっている。雪の多いところなのだ。

峠を越えて、いよいよ桑井の地に入った。

まだ、木々ははだかのままで。杉の緑にまじってこぶしの白い花が見える。

「そのさきの、鳥居のところまで停めておくれ」古びた、今にもくちはてそうな神社が見えた。杉並木の根元には雪が残っていて、地面はとけた雪でぬかるんでいた。

おばあちゃんは、つえを頼りに参道をいく。ぬかるみの上に、杉の葉が落ちていて歩きにくい。

おばあちゃんは足が悪いわりには早い。私は靴に付く土を気にしながら、後をついて行った。お社の裏に出ると、目の前が開けた。そこは、広いすりばち型のくぼ地になっていた。桜はその中央にあり、大きな枝を四方に広げていた。ふちに立つと、桜の枝が足元に来る。桃色の小さな花々が、風にさわさわとゆれる。桜の花を見上げることはあっても、上から見ることは初めてだ。

私も、お兄ちゃんも、言葉がでなかった。おばあちゃんは、じっと見つめていたが、やがて、小さくつぶやいた。

「よく咲いてくれたの……」

花びらがふうわり、ふうわりと舞ってくる。

桜の海。いや、桜の雲だ。

「きれい…」

思わず、私はふみ出した。そのとたん、なにかにひっかかり転んだ。

「危ない！」

お兄ちゃんが、かけつけて起こしてくれた。そこは、立ち入り禁止のロープがはられていたのだ。

足がすりむけていた。

「けがでもしたら、どうしただよ。ふらふらして、困った子だあ。まったく」

おばあちゃんは、機嫌が悪くなった。

桜のふちでお昼にしたが、せつかくのお花見弁当もおいしくなかった。

私が悪いのかもしれないけど、ぶりぶりしているおばあちゃんに嫌気がさしてきた。

帰りの車の中は、また静かだった。つまらないから、私はお菓子を食べては、ジュースを飲んでた。

「そんなんばつか、飲んで。体によくないね」 おばあちゃんが、あきれたように言ったが、そう言われれば言われるほど、私はジュースが飲みたくなった。

「ゆきちゃん、あんまり飲むとトイレに行きたくなるからだめだよ」

お兄ちゃんまでが注意する。

「ゆっこ、ジュース好きだもん」

小さい子のように、だだをこねたい気分になっていた。

峠を越して、くだり坂にさしかかったとき、

「あれ、あれ」

お兄ちゃんがへんな声をだした。

「なあに？」

私は、お兄ちゃんが、また場をなごませようと、わざと変な声をだしたのかと思った。
「おかしいな」

お兄ちゃんは、するすると車を止めた。

「どうしたの？」

「なんだえ？」

うとうとしていたおばあちゃんも、気がついた。

「車 動かなくなった、みたい」

「えええっ」

私は大声をあげた。

「うそでしょう。やだ、そんなこと」

「もう一回やってみるけど」

そう言って、お兄ちゃんはキーをおした。

ブブブ、ブルブル

車は動こうとしない。

ブルブル、ブルブル

「だめだ」

気がぬけたように、お兄ちゃんは言った。

「やだやだ。困るよお。お家に帰りたいよお」

私は足をばたつかせ、わめいた。

「静かにおし」

おばあちゃんの声はきびしかった。

お兄ちゃんが、しゅんとしていると、

「あんた、ケイタイ持つてるだろ」

おばあちゃんがきいた。

「持つてるけど、使えるかな、こんな山奥で」 お兄ちゃんは、ジャケットのポケットから薄型

のケイタイをとり出した。

「だめだ。やっぱり圏外になってる」

「どういうことだい？」

「ここでは、ケイタイが使えないんだ。山の中だから、電波がとどかないんだ」

お兄ちゃんの説明に、

「まったく、新兵器も役に立たないね。なら、電波の届くところまで行くってことだね」

おばあちゃんは、さらっと言った。

「そこで、誰か助けをよぶってもんだろ」

「どこまで行けば、つながるかな」

お兄ちゃんは心配そうだ。

「このまま一時間も下っていけば、炭焼きの甚さんちがある。ケイタイはつながらなくても、電話を借りればいい」

おばあちゃんは、ときぱきしていた。

「おれが行くってことですよね」

お兄ちゃんが言うと、

「決まってるじゃないか。さあ、さつさとしておくれ。夜になっちまうよ」

おばあちゃんはせかした。

お兄ちゃんは車から降りると、走り出した。「がんばってえ」

私も車から降り、去っていく背中に向かって大声で叫んだ。

お兄ちゃんが、走りながら「えいえいおー」と、手をあげた。私は手を組み、祈る思いですつとお兄ちゃんを見送った。青いジャケットがだんだん小さくなっていく。

さあーっと風が吹いてきた。

ぱらぱらと髪が顔にかかり、はらつても、はらつてもまとわりつく。午後の風は強く、髪をはらう手が冷える。手をこすっていると、

「車の中に入りな。風邪でもひいたら困るけ」 おばあちゃんが、ぶつきらぼうに言った。

ふたりになるのはいやだったけど、寒さには勝てず、車に入った。おばあちゃんは、黙って足をもんでいた。私は、お菓子を食べる気にもならず、お兄ちゃんが走っていったさきを見つめていた。沈黙が流れる。おばあちゃんが文句ひとつ言わないのが、意外だった。車は暖房がきかない。春だといっても山の中だ。外の寒さが伝わってくる。おばあちゃんは足をもみつつづけている。

そのうち、私はだんだんトイレに行きたくなってきた。ジュースを飲みすぎたことを後悔した。

こんな山の中、トイレがあるはずもない。がまんしようとしても、体がもごもごしてしまう。

おばあちゃんが、じろつと見た。

「ゆきちゃん、しっこしたいんか」

小さくうなずくと、

「なら、お花つみじゃね」

と、腰をあげた。

「お花つみ？」

私の問いには答えず、おばあちゃんは、車のドアを開けた。

「ほら、一緒に行くよ。がまんしたら、体に悪いわね」

ワゴン車のステップから、ずり落ちるように降りると、おばあちゃんはかさをつえ代わりに歩き始めた。「よっこらしよ」と、ガードレールのすきまから、林の中へと入っていく。

「トイレあるの？」

あわてて、おばあちゃんの後を追った。

「そんなもん、あるわけなかるが」

おばあちゃんは、かさで草をはらいながら、進んでいく。

やぶにスカートが引っかかる。お気に入りのレースのスカートが今にもやぶけそうで気にかかる。うまく歩けない。

「もう、やだよ」

泣きたい気分だ。

おばあちゃんが、ふり返った。

「ここがいい」

近づいてみると、白い花がたくさん咲いている場所だった。陽があたっている。

「下草もかわいているし、絶好の場所じゃ」

そう言うと、おばあちゃんは、さっさときものすそをまくった。

驚く私に、

「ゆきちゃん、いつまでも甘ったれお嬢ちゃんでは生きていかれんよ。やるときには、やる
そういつて、さっさと用をすませてしまった。
そのいさぎよさに、私は感心した。」

「そうだね」

と、スカートに手をかけたけど、やっぱり恥ずかしい。

「えい」

おばあちゃんはそう言うと、パツとかさを広げ、私を隠してくれた。
かさをつけてきたのは、そのためだったのだ。

おばあちゃんの藤色のかさと白い花たちに囲まれて、私は安心してしゃがんだ。もう、恥ずかしくはなかった。

近くの清水で手を洗いながら、おばあちゃんにきいてみた。

「お花つみって、ああいうこと？」

「そう、インドではお花つみっていうんだよ」「へえ。お花つみっていえば、恥ずかしくないしね」
おばあちゃんは、インドへ行ったことがあるのだろうかと思った。

「桜もきれいだけど、この花もかわいいね」

私が白い花を手にとると、

「ほら、咲いているこの花の下に小さなつぼみがあるじゃろ。ひとつの茎に花がふたつ。ニリンソウだよ」

おばあちゃんが、教えてくれた。

ニリンソウは、白い花びらが黄色のおしべを包みこむように咲いている。やさしい花だと思っ
た。

「二つずつ咲くなんて、仲がいいんだね」

おばあちゃんは、だまっとうなずいた。

ニリンソウを一輪ずつ、つんでもどると、お兄ちゃんが帰ってきていた。知らない男の人もい
る。

「あれ、甚さん。来てくれたのかい」

おばあちゃんが、男の人に声をかけた。

「なんだ、八重さんも一緒だったのか。車が故障して立ち往生だっていうから、あわてて来てみ
たんさ。バッテリーつないでみたら、とりあえずは、大丈夫のようだが」

「じゃあ、動くの？」

「ああ、中野まで行けるじやる。ただ、点検はしてもらったほうがいいな」

甚さんは、お兄ちゃんに注意した。

「はい」

お兄ちゃんは、神妙に返事をした。

甚さんにお礼をいい、車は動きだした。

しばらくして、お兄ちゃんが口を開いた。

「ところで、どこへ行ってたんです？ もどって来れば、二人ともいないし」
口がとがっている。

「悪かったね」

そう言うおばあちゃんの声が、やさしく聞こえる。

「別にいいですけど。でも、心配しましたよ」 お兄ちゃんの口は、まだとがっている。

「お花つみに行つてたんだよ」

私が言うと、

「なあんだ。ゆきちゃんは、まったく子どもだなあ」

お兄ちゃんは、いつもの笑顔にもどった。

おばあちゃんは、

「そう、お花つみ」

と言いながら、ニリンソウの花をゆらゆらさせた。

見ると、おばあちゃんの目が笑っていた。

私もまねして、ニリンソウをゆらゆらさせながら、もう片方の手でおばあちゃんの手をそっとにぎってみた。

おばあちゃんの手はしなびて小さかった。おばあちゃんは、ちょっと驚いたようだったけど、すぐに、にぎり返してきた。私はなんだかうれしくなつて、またにぎり返した。もっと、もっと強く、しっかりと。

おわり